

## 二条城外堀石垣の調査 一堀から見る・堀に潜る一

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

**二条城の歴史** 二条城は、徳川家康により慶長8年(1603)に築城され、同年に二条城で征夷大将軍の拝賀の儀を執り行なっています。そして264年後の慶応3年(1867)、二の丸御殿大広間において十五代将軍慶喜による「大政奉還」が発せられます。こうして二条城は、徳川幕府の始まりと終焉の舞台となりました。

城域は寛永元年(1624)から三代将軍家光により西側に拡張され、殿舎の整備が行なわれます。それが現在の二条城の姿となります。同3年(1626)年9月には後水尾天皇が行幸します。寛永11年(1634)の家光入城以後は、文久3年(1863)の十四代将軍家茂までの約200年以上、徳川将軍の入城はありませんでした。その間には落雷や大火、大地震などの災害により本丸御殿や天守閣を失い、再建はされませんでした。家茂入城に際しては、荒廃していた城内の整備が行なわれています。

維新後の明治4年(1871)には、二の丸御殿内に京都府庁が置かれます。さらに明治17年(1884)には宮内省の管轄となり「二条離宮」と改称されました。明治26・27年(1893・1894)には、京都御苑の北部にあった桂宮御殿を本丸に移築するなどの大修理が行なわれます。大正4年(1915)の大正天皇即位大



写真1 ポートからの石垣観測(西から)

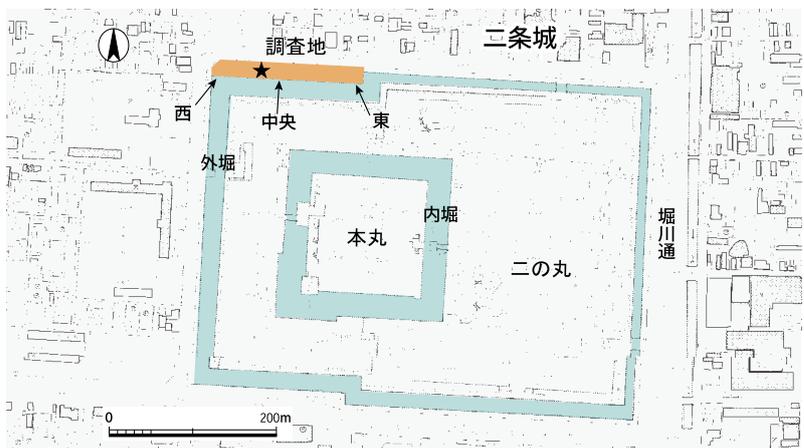


図1 二条城と調査の位置



写真2 石垣の裏込めを検出 (図1★・北から)



写真3 二条城外堀北西部 (南東から)

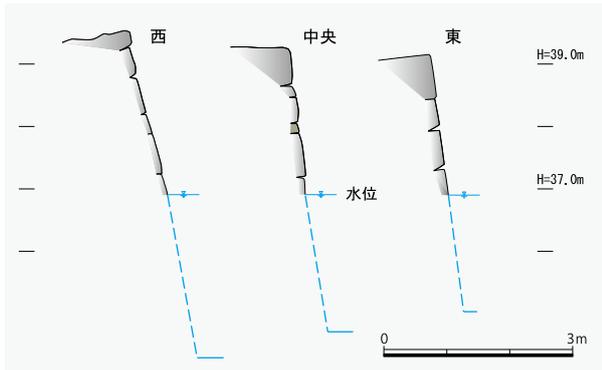


図2 石垣断面図 (観察地点は図1参照)



写真4 石垣の水中写真

典の際には、城内に大饗宴場が造営されました。昭和3年(1928)には二条城の北側が大礼記念大博覧会第2会場となり、それにともなって竹屋町通が整備されます。昭和14年(1939)には二条離宮が京都市へ下賜され、翌年から一般公開されます。平成6年(1994年)には、ユネスコ世界遺産「古都京都の文化財」として登録されました。

**堀から見る** 2016年の春と秋に、寛永期に拡張された外堀北側の石垣付近の発掘調査を行ないました。石垣北西角から北東角までの距離は約182m、最上面の石(天端石)は227石あり、その間の石垣背面に6箇所の調査区を設定しました。調査では石垣裏込の掘形を検出しました。そして、裏込が10~20cm大の栗石を密に詰められた状況や、近代以降に土管を埋めるために掘り返され、修復された箇所な

どを確認しました。また、石垣の積み上げ角度の違いやゆがみの有無などを記録するために、北西角から東へ10m置きに石垣の断面図を作成しました。石垣は西の天端石の標高が39.5m、東の標高が39.16mと東方向へ徐々に下がりますが、堀の深さは西が5.2m(水深約2.6m)、東が4.2m(水深約1.9m)と西が深くなります。石垣面の傾斜角度は、79度から82度です。さらに堀にボートを浮かべ、目視による石垣の観察や写真撮影を行ないました。

**堀に潜る** 城郭の堀を形成する石垣の水中部分を、調査担当者が潜水して直接目視で観察するという方法は、日本では初めてのことです。調査当日は悪天候と水草の発生により堀の水の透視度は約50cm程度でしたが、水中カメラマンによる写真撮影や調査担当者の観

察メモ、一部動画などで状況を記録しました。調査の結果、石の破損や欠落箇所、石材間の隙間が大きく開く箇所があるなどの状況が観察されました。これらの原因は、経年変化だけではなく、後世の積み直しによって生じたとみられる箇所もありました。

**おわりに** 二条城の石垣改修記録には、寛文2年(1662)や文政13年(1830)の地震による修復や被害があったことが記録されています。

今回の調査は、熊本城の石垣が地震で大きな被害を受けたなかで注目を浴びるものとなりました。2017年3月、京都市では、熊本城の石垣の修復に困難をきたしていることを踏まえ、二条城の石垣の状況を記録する調査を開始すると発表しました。

(近藤章子)